

かば、草葉の蔭よりえら骨路裂か  
(虎が鷹)

高慢を憂ふこと。按ずるに、「いんげん」は「いんげん」の變つた語であらう。「いんげん」は威厳で、正しくは「あびん」また「みんげん」と書くべきである。「あびん」に「ん」が增加した爲に「いん」の増加については「わんざん」の條を見よ。「みんげん」となつたのである。さて「いん」と上の假名遣については論ずるまでもなく、當時假名遣はやかましくいはれなかつた時代である。巢林子撰・水木辰之助陸奥舞に、「わしは存じませぬが、養子の親が名人で弟子の二百もござつた、道閑様いげんは仰せらるれど、私が親の草履取も彼程は厭ましたとあはれを言へば見え、淀無出世蒲徳に、「うちたん町をこしつげに、いけんふる手のみんころうのし見え、「いん」の假名遣の違つてゐるのが明かに知れる。そして「いん」が威厳で、「いんげん」と同意語であり、同じものなることも悟られるのである。

いんじゆ 代々に傳はる御國譲り御  
印位のしるしの印綬、御肌に懸け  
られたり(國性齋)

〔印綬〕印と綬。綬は印の環を繋ぎ組紐。印綬は支那では帝王の證據物とも云ふべき物である。漢書後、綬長一尺二寸法十二月、廣三尺法天地人。

いんぜふ 極樂へ引接せ人(津戶三郎)

〔引接佛菩薩が念佛の行者を引受けて極樂淨土へ導き入れ給ふこと。〕  
〔引接佛は如来を本尊とせる佛堂で、大版四天王寺にある引接堂とも書かれ、本尊は五智如来、脇士は月増地・日増地・玉照地の三尼の像を安置してある。序に云ふが、引接と引接は別義である。〕

いんち 去年松川いんちの場、朋輩

打たせし意趣晴し(二段) 彼奴め  
はないないいんちの意趣、われわ  
れどもが仲間にて見付け次第に殺  
す筈(二段)

「いんち打」「いんちん」といひ、「印地の字を掛けたら、いんちばらしうち(石打)の約語であらう。昔五月五日河原などに出て小石を投げ、或は  
〔天和長久四季あそび〕  
手に物を持つて  
敵合ふ少年の遊  
戯。徳川實紀  
附録・東照宮の  
條に「五月五日  
兒童の戯れとて  
隙を打ち、石  
を投ぜり、  
を毬にらし  
んちうち  
といふ。」  
〔天和頃所載〕



黒川道祐撰、日次紀事、五月初五日の條に、  
「以初木作大小之刀、是謂富浦刀、男兒橫  
之於腰、著頭巾、微山伏態、及晚出鴨河邊、  
左右分列、佛像而相駭、是謂印地、又稱、  
いんてんや  
(生玉)  
いんてんは「印度」(India)の訛。「いんてん屋」は印度等へ舶來したる物で、造れる袋物の類を商ふ店屋、越後秀島編、雅言俗語

聖德(安永八年刊)唐草の部に、「印帝地。俗印  
傳と云、鼠草あづき草等あり」  
\*いんちのこ ちやつと刺を袖に入れ、  
いんの子いんの子と撫摩り(日本武  
尊) 寐んれこそ、音せておよめたい  
んの子いんの子、目だに覺めたら  
背にきつと背負うて、神様へ参ら  
う参らう、の、さまの土産には、  
でんく太鼓に籥の笛、お山人形  
に花おり着せて、打着せて着せて、  
雉子のめん鳥ほろりとおとい  
て、しよのしよの、おいとしよの  
(天神記)

「いぬのこ(犬の兒)の訛。小兒を眠らさうとする時にいふ語、故に小兒を眠らさうとしていふ唄の中に出るのが多い。貞丈雜記に、「小兒を抱きて夜中他行するに、紅指を以て小兒の額に犬といふ字を書く、之をいんのこといふ、犬の子といふ事なり、此の如くすれば廢除になり、狐狸類小兒をおびやかすことなしといふ。」

いんはたてん 朝拜殿に尊あればい  
んはた殿に惡鬼あり、いんはた殿  
に駈入り給へば新背殿に惡鬼あり  
(振袖地)

〔振袖地〕新背殿に尊ければいんはた殿に惡鬼あり、いんはた殿に駈入り給へば新背殿に惡鬼あり

いんま 定めしいんまに來う程に、  
まそつとしてから來て下され(重井  
筒)  
\*いんま(今)に撥音「ん」の増加した語で、「まな(眞字)をまな(ま)」「ごばう(牛番)を「ごんばう」といふ類である。

いんちのむら 抑も馬に七個の祕  
事、やうのむら 五個の鞍、陰陽の  
策・朝風(大おろし) (小栗判官)  
〔陰陽の策策の仕立譯の名。本朝弓馬要覽に、「策の仕立譯品々あり、天地の策陰陽の策六層の儀云々」  
いんちろ 瓢箪町を腰附けに、いけ  
いんふる 手印籠の、底にたきがら  
すびがらの、烟に油煙たなびきて  
(混懸)  
〔印籠〕背腰に佩びた小匣で三重または五重に作り、兩端を緒紐で貫き、匣の内にはめと印刷を入れたのが、後には染を入れたのである。安齋隨筆卷十一、印籠筆籠の條に詳しく述べてある。「ながといんちろ」を見よ。  
いんる 十方三世の佛菩薩、衆生を  
助けんとすの誓願因位の時は願人な  
らすや(心五戒巻)  
〔因位〕因は果に對する語、位は地位。佛果を得て佛となる前に修業の地位にあるを因位といふ。正信偈に、法藏菩薩因位時。

う  
\*うい 若い者でかしたでかし  
た(三國志) うい奴けな奴きみよい  
奴だてな奴が花摺衣(鶴田川)  
かはゆらし。けなけなし。狂言・烏帽子折に、「一段うい奴ぢや」。俳書集等に、「ウいは能を  
ゲなるをほむるにウい奴だ云、ウいは能を

稱する辭なりといへり、ウとは得也 イは活用語也、又キとも活用す、得は能の義にて能くし得たりと美る詞なり。

ういらう 「うみらう」を見よ。

うがたま おがたま・稻魂・鏡の宮(國性齋) 蛇は宇賀の御魂、四郎が邪法は蛙の術(蛙合魂)

〔稻魂〕稻魂また宇賀魂とも書く、五穀を司る神である。合類大節用集(享保二年刊)神祇門に「倉稻魂、主五穀之神、出日本紀」宇賀の神體を蛇形に作る事がある。鹽尻七に「宇賀神とて、頭は老人の顔にし、體は蛇形に作り、蛙を挿へたる様にして、神社に安置し祭る時は、一器に水を盛り彼の像を入れ、天の眞名井の水などいふ文を唱へて其像を浴す、像或は金銅又は磁器なり」。

\*うかへるくも 驕る平家の行末を浮べる雲と頼みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御所勢(孕常盤)

〔浮雲〕大空に浮いてゐる雲のやうに軽きをいふ。論語・述而篇に「不義而富貴、於我如浮云」。

浮心瀬 うかむ瀬と音に聞く大貝の碑礫磊に、一つ乾して娘にすんど差しければ(鎌田)

大阪新清水寺の北坂にある浮心瀬といふ有名な料理屋に珍蔵されてある大盆の名であつて、鮎貝で作つた七合半入りの大盆である。其角の類柑子に「僧専吟、難波あたり空瀆鮎を浮心瀬と名付けて奇物とせしは、身をすててこそこの戯より出でて遠き境にも知人の影からず」晚鐘成撰、攝津名所圖會大成(巻之五に「浮瀆奇杯」此浮瀆と銘せしは貝體にて、鮎貝の十一穴あるを蓋きて器とせしなり、是に酒を盛り七合半に及ぶと云……、我戀

は千尋の底の鮎貝身を捨ててこそ浮心瀬もあれ」。

\*うきあし 玉藻水草を撮分けて、拔手浮足掬みなく(陣田川)

〔浮足水泳術の語で、足を浮けて泳ぐこと。〕

うきふね 空もどろに浮舟の、けうとく立ちし宮柱(陣川)

〔浮舟〕宇治川の附近なる浮舟の杜か。按じるに宮柱とあるからには、宇治橋の西にあつて姫大神を祀れると傳へる橋姫社の祭神を、源氏物語にある浮舟の君と誤つたのであらう。

うきもん うきもん(小後・天神)

〔浮文〕貞丈雜記に、鏡の縁を浮かせて織つた物だと云ひ、桃花露葉に、浮文は繁くすべしとある。

\*うきよぐるひ 情氣するでは無けれどとも、うき世ぐるひも齡による(出世景清)

〔浮世狂〕浮世とは無常の現世をいふ。衆生が煩惱の難れ難きも浮世のなりひで、好色をいひ、女性に狂奔するなど總て浮世狂ひである。西鶴撰・武道傳記(巻四)、太夫拾子に立名の男の條に「青柳十藏、覆坂専左衛門、この兩人供をも連れず彌に浮世狂にみだりありき」。

うきよごさ 内は裏なき浮世産、心か延ぶる種ならし(會稽山)

〔浮世産〕石壁の地紋になつてゐる上敷也。和漢三才圖會に「單席(宇波之木)俗云御産也、以美織成、文如蟹者名浮世御産、單上鋪之、故稱上鋪、出於江州丹木、著爲上、備前瀆水次之、丹波爲下」。

うきよのつる 南無阿彌陀佛の息を、引きも返さぬ梓弓、浮世の枝は切れ果てたり(隅田川)

〔浮世の枝〕この世の壽命。「梓弓」の縁から壽命を「枝」というたのである。

うぐひすこま さながら梅の鶯獨樂(松風)

〔鶯獨樂〕中空にして外部に穴ある獨樂であつて、廻轉するときによく鳴るによつてこの名がある。序にいふが、和漢三才圖會にも見えてゐるやうに、元祿の世は獨樂遊びが流行してゐたので、「當世獨樂樂し」の一節も入れられたのである。

うぐひすそで 其身は下女の姿になり、鶯袖のゆきあはぬ夫を尋ねる(大慶)

〔鶯袖〕切趾(切趾を女詞に鶯といふ)の形に袖をそきて、腋を縫はないうちよつちにしたものと見え、女重寶記(新やまとことば)の條に「うぐひすそでとはわきあけのこと」とある。

\*うぐひすぢや (鶯門松)

〔鶯〕茶色染の名、鶯の羽色のやうに鶯に茶色がかつたもの。「春知り顔に七つ屋の云々」をも見よ。

うぐひすぢや ひれり艾の生火傷、あともうぐひす痛みなし(抱朴)

「うごふ(蕪)の義、腫れて腫れ上るいぼふ」。

\*うけ 控の柏・梅擬のうけ(聖徳太子)

〔請〕立花の法式の名、心になつてゐる枝を請ける。枝、立花時勢粧(八に、「立花影傳抄之五」)請は神前にて是時の枝といひ、佛前にては手向といふ、必ず影の珍花を用ひ、佛生上へきおひたるものを用ゆ、副のしだれたるものとの取合せなり、出し所は副と長枝とを見合せ、其真中程より出すもの、左へ出づるもの、請より長く出づるものなし、是花形の左の上を能くまる道具なり、「しやうじんの條」の書を見よ。

うけこむ 主人はなけれど咲く花

や、後家のおかめが請込んで、客の替名は蠟九とて(女鼓) お勝の方(妹嫁を請込み給へ(吉野忠徳))

〔請込〕引受ける。

うけなは 響のうけなは(請人)や(松風)

〔浮世釣糸の附いた理又は魚網に附いてゐる繩に浮木を附けたもの。〕

うけへる あまのさかてなうつてうけへば(露丸)

咒咀するをいふ。日本紀に「響の字をうけへ」と訓んでゐる。伊勢物語に「罪もなき人を咒咀へば忘れ草、己が上にぞ生ふと言ふなる」。

\*うげん 有驗の高僧貴僧に仰せ、大法秘法を修せらるれども(關八州)

〔有驗〕祈禱の効驗有ること。平家物語・卷三、教文の條に「入道相國、有驗の高僧貴僧に仰せて大法秘法を修し」。

うげんだ ふたれそれつねなと吟じかへせば、それそれその次のらむうげんだとぞ答へける(重井簡)

あはう三太をらむうげんだでやまけふづくる内儀の心(丹波與作)

おやま形の俳優山下右太夫のことであらう。魂膽色遊男(巻一、奥藤は機嫌のよい榮花枕の條に「近日初狂言見せにやらうが、どの芝居がよからぞ、今からまが見ておけとあれば、……おやまの字源の文に三太の詞に「よそよそのおやまが一つ買うて見たい云云」とあるおやまは、お山形(お山の意にいうたを、徳兵衛は勘違へしてお山を遊女の意に合點したであらう。「らむうげんだ」の「らむ」は全く意味なく、只句調をととのへる爲と、いろはの縁とで冠らせたものであらう。かや

ういらう——うげんだ

うに「らむ」を用ひた例は、菅原保授手書鑑  
 (淨瑠璃) 寺小屋の條にも、あすの夜たれか添乳  
 せん、らむうい目見る親心」と見えぬ。  
 うさぎ 向 (うさぎ) 交りの鐘  
 のの 竹 (うさぎ)



うさぎもち 水ぬきの接吻をばふば  
 ふくぐるうさぎもち (三國志)  
 (鷹爪) 鷹爪と書き、「うさぎもち」類聚抄に、  
 「鷹爪。字古路毛知、陶弘景曰、鷹爪形如鼠  
 大而無尾、黑色、長鼻甚強、恒穿耕地中、行  
 犬而無尾、」

うこん 紺に鬱金に薄染淺黄 (靈門  
 松)  
 (鬱金) 鬱金草から採つた染料で染めた色、黄  
 \*右近の橘 (酒呑童子)  
 平安内裡紫雲殿の坤にある橘樹で、南階の右  
 にあるを以て右近の橘と云ふ。

うざいがき 無用の忠節仁義だてに  
 咽をほす汝等、冥途でほうざいが  
 き、その刀抜かば抜いて見よ (井筒)  
 (有財餓鬼) うんざいを見よ。

うさぎ 櫻島人打ち群れて、サンサ  
 沖に網り釣垂るる波の雄波を、  
 かき分けかき分け走る鬼の名所ぞ

や (薩摩歌)  
 「鬼」玉現即ち月。走る鬼とは月影海面に浮動  
 するをいふ。僧自休の竹生島詣の詩句に「清  
 波月落鬼弄浪」。謡曲「竹生島」に「月海上に浮  
 んでは鬼も波も走るか。櫻島が月の名所たる  
 ことは、冷泉大納言爲村の歌にも「月雪のな  
 がめのみかは櫻島浪の花さくゆふべ明ぼの」  
 と見えてゐる。

\*うさん うさんらしく吉田屋の内  
 なのぞいで、喜左衛門やどにか (夕  
 霧) 何もお道具揃うてうさんな  
 とござらぬ (薩摩歌)  
 疑ひ怪しむこと。合類大節用集(寛保二年刊)  
 言辭下の部に「烏散。按じるに支那の小説  
 に胡散とある語が常用語となつたので、  
 廣東音を傳へたのであらう。

うしおき 牛若君のうしおきに、淨  
 瑠璃玻璃は寶の玉、福女房の御祝  
 言末繁昌のはじめぬる (孕常盤)  
 「丑起」丑の冠、即ち午前二時頃に起きること。  
 「朝早く起きれば家富む意より、牛若君の  
 牛起」と同語につづけ、「末繁昌」の語につ  
 づけたので、博多小女郎渡枕中の長者親の文  
 に、「こけても土をたつかんで起きは七つ起  
 と見えてゐる。七つ起も、朝早く起きれば家  
 富むことにちつたのである。

うしおかに 猪は巖に身をふせて、飛  
 びかからんとする氣色、ただ牛鬼  
 ともい一つ (百日曾我)  
 「牛鬼」牛のやうな大きな怪物。太平記卷三  
 十二、鬼九鬼切の事の條に、長二丈ばかりな  
 る牛鬼が、額光の鬼切の刀で斬り殺されたこ  
 とが出ている。

\*うしざき 法に背く慮外ば、車裂  
 牛裂にもと嘸無念御立腹 (川中島)

「牛裂」罪人を兩牛に括付け、牛をして人體を  
 裂かしめる酷刑。土津靈神言行録下に「一  
 會津先太守源生氏(秀行)之世、令罪人跨二兩  
 牛以機籠入兩牛之間、則牛各驚怒而走左  
 右開脚、謂之牛裂」。  
 \*うしてんじん 虎が涙も引きかへ  
 て丑天神の野邊の露、消ゆる間近  
 き命なり (水朔日)  
 「丑天神」牛の使といふ俗説から天神の  
 ことを丑天神といふ。この文は曾根崎天神  
 (露の天神ともいひ今の曾根崎新道電車交  
 點の東)を指す。虎、牛、虎が涙(雨)、露、  
 露の命、これ等縁語によつて師がつた文である。

うしのした 牛若殺してうしのし  
 た、大判小判つかみ取り (烏帽子折)  
 「牛舌」したばらめ(鞋底魚)の異名を、くつ  
 ぞ」とも云ふ。體扁平で舌状をなし、背面  
 は濃き橙色に黒色の小點散布し、腹面は白色  
 である。この文は、牛若と牛舌と同頭駒を  
 用ひ牛舌の形が大判小判に似たるによつて、  
 大判小判の語につづけたのである。

うしのたまはこ 牛のたまはこ遅く  
 とも (鶴丸)  
 「牛の玉銚」牛の歩行。「玉銚」は玉銚の身か  
 ら道にかかつて道の枕詞であるが、道を略し  
 て「玉銚」だけで道の意に用ゐたのである。

\*うしのときまゐり ああものうし  
 の時参り、仇と情と怨念と、三つ  
 の鐵輪に燃ゆる火に (鶴丸)  
 「丑廻参る」丑は夜丑三つの廻で、即ち午前  
 二時頃である。この時は夜の最も更けた時で  
 ある。人を認ぶ者はその姿を人に見始められ  
 まいとして、丑の廻参りをして、願をかけた  
 のである。太平記に、或公卿の息女が貴船の  
 社に籠りて人を呪つたのも、謡曲「鐵輪」に、嫉  
 妬の念に驅られた女が他の女を呪ふにも、こ

れ等みな丑の廻参りをしてゐる。  
 \*うしみつ 人も音せぬ丑三つの空、  
 十五夜の月冴えて光は暗き門行燈  
 (天網島)  
 「丑三丑」の時の第三刻。深更「とき」を見よ。  
 \*うじやくのはし (聖徳太子)  
 「烏橋の橋」かまきぎのはしを見よ。  
 うじやくわう  
 「右橋王」こまがたごんげんを見よ。

\*うしろめたし 誠なき舅の心後め  
 たし (國性爺後目) 盗みをするも命  
 の惜しなく、あら恐しや一先と、う  
 しろめたなくも引きけるや (十二段)  
 「うしろめたし」後目爺の義。うしろぐら  
 い。不安心な。謡曲熊坂に「盗みも命のあ  
 りてこそ、あらしやうや引かんとて、長刀杖  
 につきうしろめたくも引きけるが」。

\*うすがき この世の縁は薄柿の帷  
 子高く捻棄げ (鐘權三) 京の吉岡紙  
 子染、やばてりがきかかうすがきか  
 (重升簡)  
 「薄柿」薄柿の汁で染めた薄色の薄柿色。  
 \*うすざくら 鞍馬の山のうす櫻 (實  
 古教信)  
 「雲珠櫻」重繪薄紅色の花を開き、莖長き櫻。  
 袖中抄に、鞍馬の雲珠櫻、唐麩の雲珠に似た  
 れは鞍馬の縁にいふなり」。

\*うすて 千手太郎薄手少少受けな  
 がら大汗になつて走り歸り (鶴丸)  
 「薄手」薄手疵の略。輕傷。  
 うすばた 鐵のうすばたに七つ道具  
 (薄端) 金剛製の花瓶をも、縁を薄くして浸りに  
 水を入れるやうにしたもの。

うすびたひ (日本武尊)

薄額(薄冠の意をいふ)の薄き(低いこと)冠。簡抄に「年少之人用薄額、近代依有、事類不依年齒用厚額(僻事也)」

うす蟲めら(娘) 三郎目にかどをうす蟲めら(娘) 三郎目にかどを

うすじむし(蛆蟲)の詛、人を罵つていふ語。昔原保授手筆鑑、車曳の段に、「はれ命冥加な蛆蟲めらと、あたりを睨んで進み行く。」「うすじむしはうすじも書いてあるので、濁蟲(まじり蟲を云ふ)かとも思つたが、人を罵るにいふもいかが、且その例も見當らぬので、蛆蟲と斷じたのである。」「じ」を「ず」に「ず」を「じ」に詛る例は、「じつなし(術無し)をいふ(ず)つなし」「すずめ(雀)をいふ(じ)み」と云ふやうに其例少くない。

うせ 徳兵衛めがうせまつかいさまに言うても、必ず誠にしやるなや(曾根崎)

うせ(嘘)の詛。「うせまつかいさま」「うそまつかいさま」(嘘返返様)の詛で、眞實を裏返して嘘を言ふこと。

うせうせん 皆待賢門に伺候し、右少辨介長を以て軍の次第を奏聞し(鎌田)

うせうせん 太政官の右辨官局の役名で、右大・中・左・辨官に兵部・刑部・大藏・官内の四省を支配し、庶事を上からうけて下につげ、詔勅も草する役であるから、儒者や文章生がこの役に任じてゐる。

うする きりきりうせう、初かくらひたらぬかと、振上げこすり出されて(女程)ど、へうせた(女腹切)

うすびたひ 一うたひに

うせる くらには底に熬付いた苦い所を頂かせ、また其の上を敷れふりにうせたか(大織冠)

うせる(その條を見)の更に詛つた語。こざる。来る。

うそ 忠兵衛はうそ腹の立ちわづらひて居る所に(冥途飛脚) うそ汚れた八丈縞に花色の羽織(二枚繪)小聲に呼うてうそうそと尋れまはるは過ぎし夜の(百日曾杖) 遂に見ぬ金の間をうそうそと覗き廻れど(舟波興作) 花車も下女もうるたへ、小菊を圍うてうそ顔(女殺) 汚れし綿衣に着せ換ゆれば、さしも美形の清十郎、山田の案山子とうそぶるひ(歌念佛)

うそ(薄)の語根「うす」の轉訛。深うなり。烈しうなり。ほのか。

うたいべん 右大辨早廣(彈丸)

うたいべん 太政官の右辨官局の長官で、兵部・刑部・大藏・官内の四省を支配し、庶事を上から下へうけつぎ、太政官内の事を糾し、管轄せる役所の首直を監する役。

うたかた 返らぬ水のうたかたに初歌謡ふ初蛙(烏帽子折) 寄邊定めぬ歌たかたの安房の國龍が崎に(世繼曾杖) うたかた人も我が身も(持統天皇)

うたかた(空形)の轉か。泡沫。水泡。またうたかたは泡であるから、泡を安房に取つて、うたかたの安房とつづけていふうたかた人とは、水泡のはかなきが如くはかない人。

うたくち 袱紗に歌口淨めんとし給ふを(孕常盤) 千五上勺中六下口八つの歌口打濕し(孕常盤)

うたくち(歌口)をあてて吹く笛の孔。笛の孔。「かんどじやうまく云々」をも見よ。總ての笛の孔をも歌口と云うたもので、十二段草子に「八つの歌口花の露ふき濕し」と見えてゐる。

うたさいもん 我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上に、坂町邊のな通り筋(生玉)

うたさいもん(祭文)を見よ。

うたてい うたてい事言うて下さうする、兵吉殿を殺せとは偽り、ふすまごしから私に鐵砲打たせ、それに中つて御前が死なうといふこと(三國志) ここに一つのうたてい難題(蛙合戦) 熱柿臭い、又飲み食うたな、うたてやな一滴もならぬ奴(浦島)

うたねんぶつ 人をすすめぬの歌念佛、修業の僧に身をなや(井筒)

うたねんぶつ(歌念佛)俗曲の一種、鉦を打鳴



(歌念佛) [佛念歌] (人倫訓蒙圖景所)

し念佛の節で歌ふもので、元祿か享保にかけて流行した。これを歌ふ者は僧衣を着た男または歌比丘尼の類であつた。「うたねんぶつ」の條をも見よ。五十年忌歌念佛に、観ずれば夢の世や、櫻で温めし、観ずれば何時の間にかは浮れそめ、三界をただ家として、袖笠雨の宿りにも、心とどめ、假枕とあるは、歌念佛の唱歌の一つである。人倫訓蒙圖卷、卷七に「夫れ念佛といふは萬徳圓滿の佛號なり、然るをそれに節をつけて歌ふべきや、はなけれど、末世愚鈍の者を導き、せめて耳にそれをなほ誤りて色色の唱歌を作り、これを鉦に合せてはやし淨瑠璃にせすといふことなし」(山梨大夫)をも見よ。

うたのくにゆき 金はなけれど一腰の、宇多の國行二尺許のだんびらもの(壽門松)

「宇多國行」富麻の祖、正應年間大和國に居つた刀工。この人作の刀。

うたひかろう 今宵丸屋のうたひ講に往つたれば(二枚繪)

「講講」講連中の番合。後はむかし物語に、「京の丸山の貸座敷などに、講講といふ事あり、尤衆人にて座敷を好む人いひ合せて番組を作り、座敷を借りて觀ふ、薩の一間或は縁がはにもあれ番組をば、何んして誰が誰誰誰と張出し置きに薩に誰かに、觀をすきやう人、けふは丸山に講ありといふ、行て聞かんとてすきの人と言合せ、辨當などこしらへて、一間薩或は縁がはにて、其義觀を六番も七番も聞きて歸る」と也。

うたひくに 節は哀れに身はだてに、歌は念佛の歌比丘尼(歌念佛)

幕に立つたる歌比丘尼、舞ひ舞ひ。物真似さまさまの賑ふ中に、編笠

被て錫杖ふり櫻盡しの歌祭文(寛古教信)

【歌比丘尼】もと熊野比丘尼と稱したるもので、佛法に歸依し熊野権現の事齋れめいたことをしてゐたのが、時勢の推移につれて隠し白粉薄紅を付けて伊達な妻となり、歌念佛または流行節をうたひ、小歌を便りに色を賣る尼となつた。歌比丘尼は「びくに」「びくんに」「まるた」といひ、舟に乗つて色を賣る者もあつた。七枚超請などの誓書に用ゐる牛王の群鳥の野などはこの比丘尼が賣り配つたものである。井原西鶴撰、好色一代男卷三、木綿布子もかりの世の條に「勸進比丘尼聲を誦へうたひ來り、これはと立寄れば、褐染の布子に黒繩子の二つわり前結にして、あたまたは何國にても同じ風俗なり、元これはかやうの事をする身にあらねど、いつ頃より桐登履になして、遊女同前に相手も定めず、百に一人と「ふく」を可笑し。西鶴撰、好色一代女卷之三、調露歌船の條に「そもそも川口に西國舟の促下して、我故郷の囁思ひやりて淋しき浪の枕を見かけて、其人に高袖の歌比丘尼とて」【歌比丘尼】(百人女郎品定所載)



此津に入り亂れての姿舟、艫に年かまへなる親に居ながら撮取りて、比丘尼は大方淺黄の本綿布子に龍紋の中幅帯前結にして、黒羽重

の頭隠、深江のお七指の加賀笠、うね足袋穿かぬといふ事なし、綿の二布の裾短く、とりなりひとつに拵へ、文箋に入れば熊野の牛王、群貝、耳かしましき四つ竹、小比丘尼に定



まりての一升柄杓、勸進といは聲も引切らず、流行節を誦ひ、其に氣を取り外より見るかまはず元船に乘移り、分立ちて後百駈きの錢

伊達五髮男(寶永四年刊)所載



「うたびくに」

人倫訓所載

を袂へ投入れるもをかし、あるは又御木を其値に取リ、又は刺し歸にも代へ、同じ流れと

【うたまくらら】寂蓮法師は歌枕を見入爲に、去年五月の頃より東の方に下られしが(千歌集)「歌枕」名所。養老の枕をよりどころとするやうに、名所は歌を詠むによりどころとするものなるが故にいふ。\*うち 女中の連れ來乗せた駕籠はこれか、うちも聞いた駕籠換よい(博多)【打】或詞に冠して其意を強める接頭語。「うちも」の「も」は感動の意を示す助詞。この文は、女中の連れ來乗せた駕籠だと聞いた來たとの意に、駕籠界であるから語氣強く「うちも聞いた」というので、食ふを「どち食ふ」(その條を見よ)といふの類である。\*うちあはび 梅干・海月・打飽(國性爺後目)【打飽】斗飽は飽の肉を薄く切き可延して乾したもので、祝儀に用ゐるが、古くは劔がな

らで打延して打飽と云つた。\*うちおび 繁縫縫うたる打帶の厚さは板の如くなるを、二重ながらむんずと取り(五人兄弟)【打帶】組帶。武家石目抄、衣服部に「打帶は即ち組帶なり、古紐を組むといひ、今はうつといふ。\*うちかた うちかたの入譯も咄で聞いてゐますれば(曾根樹) 此れはまあまあ結構なるお内かた、ついでしか御出申さねば(女腹切) 此れ内方か志がしたいとある(薩摩歌)【内方】家の内。また人の妻を敬ひて「いふ」は「ないき(内儀)の類。\*うちがひ 幸領が打がひより、其の三百兩合點(莫途飛脚) 腰のうちがひ取出し(永明日)【打連】金錢を入れる胸巻の葉。夏山雜談に「打師といふものは狩の時丈の食物を入れて、犬牽の腰につく袋なり、飢をたる犬に手して食物を與ふれば手にくづくもいふ也。是を地に打つては食物の出るやうにされるもの也。…今商家に錢などを入れて腰につくる袋をうちがひといふは、犬の打師に似たる故也」とあれど、打師の義ではなから、打連ひに帶びるもの名である。\*うちかぶと 蘭奢待の名香内兜に焚きしめん(女帯) 熊谷取つて押へ内兜を見れば(大原問答)【内兜兜の内兜。\*うちかやす こなさんの死骸の帯解き紐解き打かやし、詮議のあるをじろじろとそもや見てあられうか(井井筒)

「うちかへす」(打戻)の説。

**\*うちしき** 大慈大悲の繪像をおろし  
打敷に擡げ奉れば(蛭合歌)  
〔打敷〕佛壇の臺上に敷く布帛。

**\*うちてのごつち** 帳面ばかり合に  
合槌、いかな打出の小槌なりとも  
續くべき様なかりけり(永朝日) 天  
下平民長久のうちでの小槌とは  
足なんめり(今川了俊)

**\*打出小槌** 思ふ儘に財寶を打出されると云ふ  
槌であつて、大黒天の手に持つてゐられる槌  
は即ち打出の小槌である。寶物集一に「こ  
れば人の寶には打出の小槌といふ物こそ能き  
寶にて侍りけれ」廣野に出たあまやかしかん家や  
面白からん妻、男や、遣能からん從者、馬牛  
食物、衣物など口々に任て打出してあらん  
こと云云。

**\*うちと** 方方の贈物もの、うちとの  
者の手は足らず(重井簡) 其間にう  
ちとの者一獻酌めや(萬年草) 現在  
弟に殿様付けうちとの者に追従す  
るも母の無い姪子ども可愛がらせ  
う爲ばつかり(卯月調色)

内。家内。家内の人、内との「とは」外  
であつたのが、外の意味が失せて、かく用ひ  
るやうになつた、即ち「うちと」は内外の轉  
義であらう。(或は宗徒の者「の徒」と同じ語  
で「とある」の義か)。

**\*うちのさだり**「さだり」を見よ。  
**\*氏の長者** きやつた帝都に訴へ、氏  
の長者の御成敗にまかせ(三世相)  
その氏族に於ける宗家總領をいふ。後には特  
に長者の宣旨を給はりてこれを稱することと  
なつた。室町時代に及んでは藤原氏の攝關・

源氏の征夷大將軍となる者のみが之を稱し  
た。兩都の社人衆人は氏の長者の管轄であつ  
て其犯罪は氏の長者に糾弾させたものである  
**うちも聞いた**  
「うちも」を見よ。

**\*うちもの** 打物閃いて切つてかか  
れば(鑑録三)  
〔打物〕太刀、薙刀の類、打物撃へて作るよりい  
ふ。(人を撃つ物のなほよりいふとの説は非)  
**\*うちやうてん** 面目なしと戻りか  
ね、心は有頂天王寺、神子町に迷  
ひ来り(か)〔卯月紅蓮〕

〔有頂天無色界の第四天非想、非非想天の稱  
で、三界欲界、色界、無色界の最高所にある。  
有頂天にのぼりつめる意から轉じて、或る一  
事を一心に思込んで他事を顧みぬこと)に  
ふ。二の文は「有頂天に」天王寺をかけ  
てつづけたのである。心中骨庚甲に心はうち  
やうかんてんの、うつわつさびとせねば  
とあるは、有頂天に寒天(ところてんを晒し  
たもの)をかけた語。

**内を走る** わざくれやげぢや、ばれ  
て出て忍男の構があるとうんと  
うて捨てうか、いつそ内を走らう  
か、いやいや源五兵衛様も目蔭の  
身(薩摩歌)

家の内を走り出る。出奔す。  
**\*うづ** 五度逢ふものを三度逢ひ、二  
度を一度になす時は、親方も機嫌  
よく戀に身をうつ事もない(女腹切)  
命惜しい程なら高で身をうつ事も  
ない(生玉) 寄つて搦めよとぞよば  
れば、兩方門をばたとうち、町

町起きて棒すくめ(加増曾我) 町  
中俄に騒ぎ出し、棒よ熊手よ提灯  
出せ、大門うてとひしめけば(露門  
愁) 見事香もうちます、此わら  
んぢもわしが作つた(丹波與作) 祭  
に行かうと氣がせいて、馬の香さ  
へ打たなんだ(堀川波鼓) いつやら  
の紙花も思の外連なばり面目な  
い、これも拂と一度に遣る、今改  
めてこりやばつとうちならほすわ  
と、捻つて出せば(鼻紙)のしらごか  
しこそ笑止なれ(二枚槍) かるたの  
打ち様存ぜず(大經師)

〔打〕身をうつとは、身を棄てる。身を亡  
す。神代紀上に「吹葉氣噴之狹霧を」ふき  
うつらふぶのさきり」とよんである「身を  
うつ」を見よ。  
〔門を打つ〕「打つ」は「扉をうつ」などいふ  
「うつ」の類で、閉ぢる意、おほもらうつ」をも  
見よ。  
〔香をうつ〕「うつ」は、香を打しなへて香を  
作るからいふので、作る意。  
金銀また煙頭を露と云ふより「つゆ」を見よ  
それを遣すことと打つ。

〔かるたを打つ〕とは、骨牌札を打出すことで、  
即ち骨牌の遊技を行ふをいふ。黒川道筋撰・  
雍州府志・土庫門下、賀留多の條に、其爲戲  
謂「打」賀留多。

**\*うづ** 舌を抜いて烏頭の葉に包み  
(醫物類)  
(鳥頭)とりかざと(毛茸科)の漢名、山野に  
自生する多年生草本で、高さ二三尺に達し、  
地下に多肉の根を有す、葉は互生して整狀に

分裂し光澤がある。花は青紫色或は白色で鳥  
兜狀をなせる不整齊の萼を有す、この草は  
猛烈な毒を有し、根を藥用とする。  
**\*うづき** (凱陣八島) 卯の花月佛降誕  
ましまして(賀古教信)  
〔卯月〕卯花月ともいひ、陰曆四月の稱。  
**\*うつけ** やいうつつけめ、おのれ商人  
の又しては又うつけは店を明けて餘  
所歩き(生玉) 人をうつけにするば  
醉狂が亂氣か(蛭合歌)  
〔空〕失心の義。ぼんやり者。ばか。 易林本  
節用集に「空」。

**\*うつまみやうわう** 俄に觀念を改  
め護身印を結んで、うつまみ明王  
五大尊の法を責かけ(以呂波)  
〔鳥羽砂隱明王〕梵名 Vajrahūman ウツチ  
フシユマン、密教明王部に屬する神で、不淨  
金剛・火頭金剛などの別名がある。忿怒の形相  
とを頭上にかざし、鬚髯を持ち髪を握つてあ  
る。の神咒を誦する者は其功德によりて、  
除病・避難・受福・伏魔等の利益を得るといふ。  
**うつくしくにたま** 鬼神も挫く勢は  
うつくしくにたま 神力雄健(徳)  
斯くやらん(日本武尊)

鬚鬚または現國魂など書き、大國主の神を  
いひ、神代に少名彥大神と力を合せて、天下  
を經營し給ひ、蘇我・蘇我などの道を教へられ  
た。

**うつしのじやかう** 船から船へうつ  
しの鼻香四十(博多)  
〔鼻香〕香和漢三才圖會卷三十八、獸類と鼻香  
の條に、「今所産麗香、雲南者爲上、東京  
者爲次、福州南京又次之、有真偽數品雜

四三

明大抵博覧者爲最上、有皮膜（うつけ）、其之（うつけ）一箇重自（うつけ）五錢（うつけ）、可（うつけ）八錢（うつけ）、一種無皮膜、如（うつけ）二煉粉者（うつけ）、名曰（うつけ）傳染麝香（うつけ）、共赤黒（うつけ）云云。

**\*うつけ** 手を通されば便なき袖のうつけのうかけ姿（聖徳太子） 戀風の身にしじみ川（曾根崎） つせ貝現なき（曾根崎）

〔空虚〕一虚具（うつけ）は肉の脱けた介殻。

**うつけみ** 名を縮合と付けたるも、空蟬・夕顔・若紫・明石の君におしつづき、ならびなしとの心かや（千正丸）

〔空蟬〕源氏物語・空蟬の巻に見えてある美女であつて、性質つつましげに情に驅られることなく、理性的の女である。ここに「へる納合・空蟬・夕顔・若紫・明石」は皆源氏物語に見えてある美女で、各その名の巻に出てゐる。

**\*うつけみ** はたと打つやうつけみの、はかなき老の腕力（虎が懸）

〔うつけみ〕は願しき身（現身）の意（うつけみ）の「うつけ」の意（うつけみ）、命・身・世などの枕詞とする。

**\*うつそり** 此うつそりが夢にも知らず（曾根崎） 色の上にてたらしこみ、眞の蕪子傳授の巻物してやり、権三めにうつそり（せう）（羅羅）

〔空〕空虚の貌。まぬけもの。ほんやり。和訓栞に「鳥にウソあり云云、ウツソリといふ俗語も亦此鳥に据なるべし」。

**うつらわうじ** 寶引骨牌（うつらわうじ） うつら王子が八千歳（雪女）

〔寶引〕雪王子（うつらわうじ） 寶引（Udraka Ramaputra）のことで、婆羅門の名。釋尊出家して道を問はれた仙人で、その天壽八萬劫とし、

或は八萬歳とし、巢林子は八千歳として居る。名義集二に「聖院羅羅羅王子、亦云聖頭藍弗、此云羅羅、又云極羅」。寶物集に「聖頭生天、うつら八萬劫」。唐草草子に「東方朔の九千歳、うつら八の萬歳、長命居士の一十千歳。巢林子のこの文は、骨牌を打つたの打つに聖頭藍王子をいひかけたのである。

**うぶし色の御所染（殿大臣）** うぶし色の御所染（殿大臣）

〔空〕五倍子色（うぶし）五倍子の中の虚なる空（うぶし）五倍子といふ。鹽膚木の葉に生じた瘤状の五倍子に少し鹽をを加へた染料にて染めた薄黒の染色（うぶし）、まづ初春の空色（うぶし）云云を見よ。

**うつぼぐさ** つれだつ道のおそかれと、いのる心のあやにくも、早く射る矢の靱草、浮も瀨もなき水草（用明天皇）

〔靱草〕草の名。莖は四角形で高さ一尺許に成長し、葉は薄荷に似て對生、六月頃唇形の紫花を開き、種状花序をなす。



〔うつぼぐさ〕

**うつぼはしら** おのれ引裂いてくれうもの、うつぼ柱に身を隠し（振袖絶） 思も奇らめうつぼ柱の蔭よりつと出で（吉岡染）

〔空〕禁中殿上の間の隅にある中空の柱であつて、雨水その中を流れ通るやうにしてある。

**うつほぶね** あだしが浦のうつほぶね、み無きものと知りながら（重井筒）

〔空〕大木をくんで中をつらに造つた舟。

**うづみもん** あつと答へて埋門の扉開けば（徒合歌）

〔埋門〕禁中朝平門あたりの裏小門をいうたのである。石垣土塼などの下方に設けた門。

**うづらころも** 羅綾の袴・錦縮の襪引（曾女） 同じ思に朽果てし鶉衣（若深き） 女護鳥

〔鶉衣〕破れて短くなる着物。荀子・大略篇に「子夏黻、衣若鶉、人曰、子何不仕、曰、諸侯之賜、我者吾不爲臣、大夫之賜、我者不復見」。

**うづらもち** 深草とは鶉餅（女櫛） 鶉餅皮薄く圓く腫れた饅頭であつて、鶉焼とも云ふ。嬉遊笑覧に「鶉やきはうす皮の十字饅頭のこたひひならん」。

**うづつり** 虎様や少將様のうづつりといひ、お二人をじよさいに思ふ心でも祐經かばふ心でも誓文くされ無けれども百日曾我（百日曾我） 弟のうづつりにもなれかし（百日曾我）

〔移〕種合。関係。よしみ。ゆかり。

**うでぐるま** 小腕むすと掴んで、得手物ヤこれわいな、腕車にどうと投げたりける（酒吞童子）

〔腕車〕腕を掴んでぐるくる振廻すこと。

**うでこき** 黒髪権大夫に腕こきの侍は仕損する事もあるまじ（弘徽殿） うでこき（腕利）の轉か。伎倆のすぐれてゐること。和訓栞に「うでこき、飯者やいふで、うでこきへり、搦腕の意也」。

**うでが** 今日ば局屋で彼の田舎のうてすに、せびらかされてつぶり（冥途飛脚）

〔打てす〕は動詞と助動詞と合した轉成名詞で、拍子の打てぬこと。間抜け。野暮。巢林子作聖徳太子繪傳記に「鳥主一圓うてぬ顔」とあり、また同作心中天竺島に「小氣味の悪む女郎やちや、流石の武士も打てぬ顔」とある。うてぬ顔も、拍子抜けた怪訝顔の意。

**腕無のふりづんばい** 腕無（ふりづんばい）の意。腕を引く、長崎には物の堅めに血酒飲むとや、偽でない惣七が心底、腕引いて誓を見せんと（博多）

腕に刀を引いて血を出す意。誓に町人博徒の類が、腕を刺して血を出し、或は酒に生血を滴して飲み、また傾城が情夫の爲に生爪を刺しだすことが當時行はれた。

**うてぼし** 重ねてかかる慮外せば、うてぼし腕いで腕き折らん（嵯峨天皇） 仔細をわかさせ、わかさすば、長刀持つたるうてぼし共（坂折） につくれん（堀川波鼓）

〔うてぶし〕腕節の詠。

**うどののあし** 元來長ば海道一の有徳人、三十餘人の流れの君を持たれしが（小栗判官）

〔有徳人〕分限者。富豪者。

〔編殿〕葦津國三島郡五領村大字編殿の堤に

生茂せる葦をいひ、葦木く高さ一丈に達す、葉は狭くし、長く、褐色花を開き、繡花序をなす。この葦は葦葉の茎にふと、其高。\*

うらな 見かけは骨も太けれど、近年骨づつきにて中がうらなになりましした(唐船噺) \*うらな(空虚)の轉。

うらな とう逢ふことは優曇華、こなきの手に死にたい(永朝日) 優曇華の咲く時は拜みて杖を折るとかや(百日賢教) 一眼の龜の浮木に値ひたる心地ぞや(百日賢教)

〔優曇華〕梵語「優曇鉢華」(Udumbara)華の略。曇華華と譯し、天空にあるといふ樹の華である。この樹は實ありて華なく、三千年毎にはじめて華を開くと云ふ。若しこの樹に金花ある時は佛世に出ると云ひ、又轉輪聖王世に出ればこの花開くと云ふ。かかる所傳よりして世に稀な事と珍しきこと、又は喜み難らるるに云ふ。般泥洹經に、「閻浮提内有摩樹王、名優曇鉢、有實無華、若金華生者、世乃有佛。」

うらな 一眼の龜の浮木にあひたる心地ぞや(百日賢教) 〔優曇鉢華〕優曇華又は優曇鉢華ともいふ。 \*うらな とう逢ふを見よ。 \*うらな とう逢ふを見よ。

うらな 唐琴がうなじ引つまんて投退け(睦合歌) うな玉・手足・足玉の

うらな 唐琴がうなじ引つまんて投退け(睦合歌) うな玉・手足・足玉の

うらな 唐琴がうなじ引つまんて投退け(睦合歌) うな玉・手足・足玉の

うらな 唐琴がうなじ引つまんて投退け(睦合歌) うな玉・手足・足玉の

緒の繰返し(振袖地)

〔緒くび〕「うなじ」(項)はえりくび。髪注(倭名類聚抄)に、「項。宇奈之、今俗呼ぶ衣利久比、又衣利毛止、頸後也」うなじ玉は頸の周圍に纏ふ曲玉の類。

うらな 食ふ程お山が食ひたうなつてくる(永朝日) 〔鱒〕鱒は鮭、鱒丸(こ)の鱒だといふ。好色淋瀝破袋寶永八年刊巻之三に「そつと鱒飯あがりませ、げによからうと鱒田鱒、勢の薬と花車が引く」菓林子のこの文意これにて明である。

うなきいか 鱒・瓢箪・鯉いか(永朝日) 〔鱒風〕「か」は「か」のぼりの略。鱒の形をした紙鳶。元禄寶永頃流行した紙鳶で、その形の奇なものが多い。

うなきわた ねらりくらりの鱒綿、取上婆の年玉なり(田村) 〔促綿〕綿綿とも書く。豊金、淺黄などの染綿で作った綿帽子。産業袋に「促綿、うらな・淺黄の染綿にて作る」

うなるをさめ 生田の川に身を棄てしうなる少女が名のしるし(采神記) 〔養少女〕項に髪垂れたる少女。養少和名類聚抄に、「養少。和名宇奈井俗用垂髮二字、按宇奈井郡居文義、髮少項之謂也、然則宇奈井比三之和良波、稍長而猶未結髮也、蓋謂十三四歲者」生田の川に身を棄てし云云」をも見よ。

うにかがる 彼の唐土のうにかがるといふ歌は、水上の悪毒をおのれが角にてそそぎ消し、國民の命を助くれども、獵師は恩を辨へず、

獨角獸を殺して角を取る(女護鳥)

〔維句語〕(Urus)の義、(Cornu)角の義。Uricornu 英語 Unicorn)「角を食ふ」哺乳類中の蹄水類に屬し、海原に似て、雄は上頸の二門歯大に發育し、其長く前方に突出し、其表面に螺旋狀の溝を有す、擊用以供せられる。本草辨疑・五の九に「維語一をウソといひ、角をカフルといふ、此獸一頭



一角なる故に名と、犀數千年にして變じてウソカフルとなり、皆獨角の如く頭に一角あり。山に遊ぶありて、毒谷川に流れ出づ、鳥獸此水を呑んで皆死す、一角此川に入て身を洗ひ、水呑むといへども死せず、鳥獸一角の毒を解することを知りて、同じく水に入て呑み、身を洗ふと云傳ふ」と見えてある。もとより妄説なれど昔はかく信ぜられた。

うぬ 今日節句は嘉平次の顔が見えぬと、うぬがこと悔んで可愛や泣いて歸つた(生玉) 日ごろそなたに心を盡す由兵衛め、どううけどもうぬが爲よいやうに書いたは定(今宮)

うねめ 浅くは人を思ふものかばと、陸奥人によみけるば、采女なりけるゆかりかや(吉野忠信) 浮きもやらわきもこの、采女が執心侍ふなり(心五飛魂)

〔采女〕「うな」(垂髮)の義、未婚女を云ふ。昔那司語氏から女子の容貌を采女と稱する者を擇んで祭中に奉れる者を采女と稱し、天皇の御饗を給仕する女官であつて、上古は

主上の御側近う奉仕した、浅くは人を思ふものかば)をも見よ。

うのはな 緋絨や譽はくちぬ黄金と、名を卵の花にふしなばめ白絨絨(用明天皇) うのはなをどし(文武五人男)

〔卵花〕卵花絨の略。蒨黄系と白系とで綴る。先づ袖拵とも、菱織板から上二段ばかり蒨黄系で綴りそれから白系白系のみで綴る。白は花の色、蒨黄は葉の色をかたどつて、か名づけられたといふ。は緒通の義でなくて、威の義である。

うは 高砂の尉と姥が離別して(壽門松) 〔姥老嫗〕謡曲・高砂に、「この尉は津の國住吉のもの、これなる姥こそ當所の人なれ。」

うはおひ 上帯草摺脇立にむんずむんずと取付いたり(兼好) 〔上帯草摺〕腰のあたりで纏ひ附ける帯。

うはがひ 膝枕そつと外しは外せしが、うはがひの棲肩に敷かれ(暖感天皇) 〔上交社〕

うらがもち 乗おくれじとどさくさ津、お姫様よりまづうらが餅(丹波輿作)

〔輿作〕餅が餅乳母は姥・嬬とも書いてある。近江國栗太郡草津町の名物である。西鶴雜傳巻一に「草津の宿の矢倉といふ所は死が餅の名物。名所輿作に、「名物乳母餅といふを輿作(草津)にて賣る。土人の言、江州任々木履形六角左京大夫義賢といふは永祿十二年織田信長の爲に亡されぬ其子孫ははばりて、當永の頃まで郷代官の如きものありしが、實によりて謀滅せらる。其時如死三歳なる者あり、乳母養育の便りなければ、餅を製して在還の

うらがもち 乗おくれじとどさくさ津、お姫様よりまづうらが餅(丹波輿作)

うらがもち 乗おくれじとどさくさ津、お姫様よりまづうらが餅(丹波輿作)



道に持出で、大名萬家の乗物などにすがり、抱きたる子は甲あつたり、其養ひぐまにと打敷きければ、自らその借賃を感じてこれを買入人多く、後遂に小店を開きければ、これを求むること往來の例となり、乳母が餅とぞもてはやしける。

うはきがらす 浮氣鳥とそやさされて、月夜も闇もこの里へ、光満寺といふ坊主客(女腹切)

「浮氣鳥」浮氣とは心浮薄であつて眞面目でないこと。鳥とは色町をぞめらて歩く客をいふたもので、遊女を「買を賣」といふを、鳥の鳴聲の「かをかか」に取つて、鳥といふたのである。(旅する者を旅鳥といふは、鳥の鳴聲に關係はないが、浮氣鳥などの語から聯想されて出来た語であらう。)阿波座の野良鳥をも見よ。

\*うはさくら 身は百歳の姥櫻(真古教傳)

「姥櫻」彼岸櫻、羅山拾稿に、「この花(彼岸櫻)繁榮にして枝上葉なが如し、老葉多く落つて無し、幽と葉と和訓通ず、故にこれを姥櫻といふ。」

\*うはさし 夷狄征伐の出陣に、上刺の筒矢を奉つて合戦の勝負を試みしより(五人兄弟)

「上刺」旗に二十五矢をさした時に、上刺と中刺の矢をその數の中に入れてさすので、上刺は筒矢である。五武將談に「上差の流筒矢」旗の上にあさすなり、此上さしの矢取練習ある事なり。

\*うはそく 誠にこの山は葛城苦提と名付け、役の優婆塞精進潔齋し給ひて(野寺忠信)

「優婆塞」梵語「Upasaka」。在家にして佛弟子たる男子の稱。河海抄に(源氏物語)権姫の巻の條「優婆塞は梵語唐土翻して近事男」と云へり。俗ながら佛道を修行する人なり、佛の四部の弟子のその一なり、賀茂役小角元年三十二にして家をはなれて葛城山に入りて、藤の皮を衣とし松の葉を食として、孔雀明王の呪をみて、つひに仙術を得て鬼神を従へ侍り、是を役優婆塞と號す、山伏の行は是よりたまはれりとなむ。

\*うはたまは 烏羽玉の夜の衣を返しては(持統天皇) さながら邪淫の狂女の如く、戀慕に迷ふうばたまの、髪も亂れ氣も亂れ(天鼓)

「烏羽玉」日記「萬葉集昔「ぬばたま」と見え、古今和歌集「うはたま」とも見えてある。「うは」は「ぬ」の轉じたものである。「ぬばたま」とは射干の實で、その黒きより總て黒いと聯想される類の「黒玉」夜「闇」月「夜」髪などの語の上に、「烏羽玉」を冠らせてその語の枕詞とする。古今和歌集、卷二の部に、「いとせめて戀しき時はうは玉の夜の衣をかへしてぞきき。」

\*うはつか うばつか頼朝卿人を捨てさせ給はぬ餘り(加増曾我) 右ばつか頼朝文武に富み(藤原)

「右様」右大将をいふ。百官譜「楠木正虎天正十三年自筆本」に「大將 唐名頼朝大將軍、常云尋府又云尋下、易林本節用節に「尋下大將」。

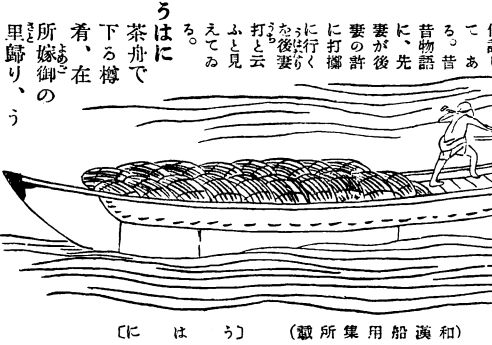
\*うはつらりゆうわう (松風)

「優鉢羅迦王」優鉢羅「梵語「Uppala」は青蓮華紅蓮華、靑色蓮花などと譯す。その池に滋

お福王であつて、八福王の一。法華文句二上に「退鉢羅、此云靑色蓮花池、謂依池住、從池得名。」

\*うはなり 間夫のうはなり打つ波

「うは」は重なる義、「なり」は「ならび」(並)の約つた語。後妻をいひ、また轉じて、嫉妬の意に用ゐる。和名抄に「和名前妻、古奈美、後妻、宇波奈利。骨董集に「嫉妬」と書いて「うはなり」と傍訓してある。昔昔物語に、先妻が後妻の許に打擲に行くに、後妻を打と云ふて見えてゐる。



うはに 送る葬禮や(今宮)

「上荷」上荷舟、和漢船用集卷之五に「上荷舟、攝州川に多くあり、荷物運送の舟、七村上荷、中船上荷、新舟上荷、堀江舟と云うて品あり、ともに二十石積なり、堀江舟には三十石積あり、舟深くして海をも川をも乗るべし、川口より本船の上荷を取る名なり、又田屋より荷物本船に積むるも此舟を用ひ、上荷舟所あり、播磨上荷、堺上荷、房州上荷、名同じけれども其制異り。」

うはもる 挨拶も何するやら、聲も上漏るばかうなり(生玉) 斬られた心は死み氣はうばらもり(安教)

「初冠」元服して初めて冠を著けること。「うは」は「うは」の転じたもの。武官の願狀といふに、兩股を縫はず、禰も無し。

\*うはのきぬ 禁色の御袴、小葵の上の衣下し賜はる勅宣の御使(虎が窟)

「上衣」袍をいひ、束帯の表衣である。文官の袴に付けたもの。兩股を縫う(襦)「襦」の絹を横に縫つたものがある。武官の願狀といふに、兩股を縫はず、禰も無し。

上村吉彌 上村吉彌は伏見堀ちやとおしやる、義理はの、舟板町の舟板の末には沖に乗り出し、帆を十分のしるしとて、今から人やこが

實水亭保領に於ける大坂の俳優で、女形を勤め、年若うて美貌であつたので、役者組織(享保元年刊)に上の位付となる。この文の藝評にも、伏見堀(今の京町堀)と見立て、末

は大海に乗り出すものと、今から懸望されてゐる。

**うほうどうじ** 日の本照す日の御神

も、雨寶童子の御名は普き(寶釋山)雨寶童子の御相好、妙なる御聲あざやかに(女橋)

〔雨寶童子〕天照大神をいふ。右手は金剛寶鐲に支へ、左手は掌上に寶珠をとりて立ち、頂上五輪塔ある姿を、天照大神日向下の御像としてゐる。合類大御用集(寛保二年刊)神祇門に「雨寶童子。俗云日神垂迹、本地大日」雨の小野の小町をも見よ。

**うま** 南無三この馬落ちた(雲門松)

〔馬將棋の語、桂馬の略。〕

**うまげた** 藪所に通ふ馬下駄に露

ふみ分けて、飛石の道を手燭に耀かせ(日本武尊) 忍ぶ夜つらき馬下駄の、げらなをくくみ緒、總はな緒(加増管弦)

**うまさぐり**

〔馬下駄〕駒下駄ともいひ、昔は庭に穿くのみ用ひた。

**うまさし** 間屋馬さし親方へこと

わつて、海道筋のこきの實なぶらあげ(丹波興作)

〔馬差〕江戸時代宿驛の役人で、人馬を指圖する者。

**うまじり** 旗標馬標兜の星を輝

し(最明寺殿)

〔馬標軍中にて將帥の側に立てて、その所在の標とするもの、永祿頃からはじまつたと云ふ。その形は家によりて異り、豊臣氏の千生鬘草、徳川氏の五本骨の金扇など種類ある。〕

**馬出二重の壕**(持統天皇)

〔馬出人馬の出入を敵に見せぬ爲に城門前に作れる土手であつて、その作り方には法式がある。甲陽軍鑑に「山本勘介申上る、馬出と申す物は城郭の眼にて候、仔細は城をまかれて、城内より備を出すにあふなげもなく候、又攻手に成申して取よせに候。〕

**うまつぎ** 馬次までやれやれとせ

がまる(丹波興作)

〔馬次道中にて馬をつきかへる所、即ち宿驛。〕

**うまつり** 馬取中間草履取(羅襪三)

〔馬取〕馬の口取。

**うままはり** 馬廻蹴ちらかし押な

らべてむんすと組み(源義經) 政山三五平といふ馬廻(堀川波敷)

〔馬廻〕主君の馬のまはりに附添ふ侍。人倫訓蒙圖書(卷之一)に「馬廻。主君騎馬のまはりをかこむの謂なり、平生は使者取次後にはあたらす、番役をなし、諸事奉行役又は都奉行代官等の職、馬廻の中よりつとむるなり。〕

**うまもち** 馬持が好い故に其月毛も

一兩年ぬつきりとよくなつた(羅襪三)

〔馬持〕馬の持。扱。馬の飼養。

**うまやらい** きりく乗らつしや

れ、馬やらいとぞつこうどなる(丹波興作)

〔うまやらい〕馬遣がつかまつて「うまやらいとなり、それに母音「い」の増加した調である。馬士が馬を追うて客を呼ぶ時の言葉であつて、馬遣らう。馬遣りませう。〕

**うまやをう** おのれば馬屋を得たる

とや、當分それは入らぬこと、馬に乗るまで牛若が草履直せ(幸常盤)

〔馬屋を得〕馬を扱ふに術を得。

**うみ** 馬の鞍にもうみあれば鹽出と

いふも面白く(融大匠)

〔海〕鞍橋にあつて、前輪後輪に通つて、高くなつてゐる。古兵器圖解。鞍具部に「岡本記云、鞍は海あるが本なり、うみなしは略儀なりと云へり、海なしの鞍を世に布袋鞍と云、其形に付ての名なるべしと甚俗也、只うみなしと云べきにや。〕

**うむ** 私仕事に賃うみ(丹波興作)

上り下りの客達の洗足取つて、芋をうみて裏背戸掃いて(小栗判官)

〔積〕藤字を細く裂いて、これを縫合して盛てる。昔下婢は仕事の隙に芋を積むる内職としてゐたのであると云をこけしをも見よ。〕

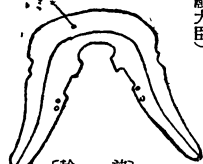
**うめ** 梅かんばし松高き、位はよ

しや引締めて、あはれ深きは見世女郎(冥途飛脚) 名取の松梅二十五人づ(扇八景)

〔梅〕遊女の位であつて、天神また天職ともいふ。梅は天神の縁によつた名で、松(太夫のこと)の次に立つ遊女の位である。「てんじん」を見よ。〕

**うめつば** 梨壺梅壺夜の御殿(天神)

〔記〕藥中五舎の中で西方第二にある、本名を擬、花舎と云ひ、中庭に梅樹あるによつて梅壺といふ。「梨壺殿に僧正あれば云云」を見よ。〕



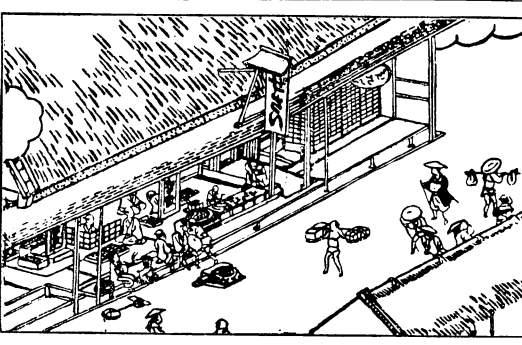
**うめのあめ** 見送る中に降る涙、つれなや神の梅の雨生玉

〔梅雨〕つゆ。さみだれ。ここの文は、天神の縁ある梅に梅雨をかけたのである。〕

**うめのきのぜさい** 梅の木のは齋の辻で身を粉にはたいてやつて見た

(丹波興作)

〔梅木〕是齋梅木は近江國草津と石部との間にあつて、本名を大地郷村と云ふ。是齋はこの地で和中断といふ藥を賣る本家の名である。〔東海道名所圖會所載〕梅の木のは齋の辻



秋里齋島編東海道名所圖會(卷二)に「梅木。本名大地郷村なり、ここに和中断の藥店三軒許あり、是齋を本家といふ、所の名の梅木を氏のやうにおぼえ、家の名の是齋を藥の名とお

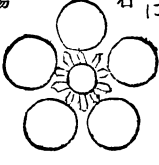
ぼえぬることは、勸屋或は小田原の外郎の  
たぐひならんかし。「わちゆうさんを見ん。  
うめのごよみ 春を以て色香に鳴る

梅の暦の根本大經師(大經師)

「梅暦」山奥では梅花の開くを見て春を知ると  
の意から、梅花を云ふ。俳諧時記奏草に、  
「梅暦。梅は山家語、山中には梅の咲くを  
見て春を知ると云ふ心にて盛といふなり」。東  
林子のこの文は、梅の暦の語に、感を作る  
大經師をいひかけたのである。

\*うめばち 加賀に  
梅鉢百二十萬石  
(薩摩歌)

「梅鉢」紋所の名、  
梅花の形を正面上に  
見せたもの。



〔ちばめう〕

うめぼうし 身揚

り分のおどもりも東方朔が九千  
兩、それで残らず梅ぼうし(聖女)

大事の太夫様に鹽の辛い梅ぼし(はは)

「うめぼし(梅干)に母音(う)の増加した語。  
長壽を保つて顔面梅干のやうになつたこと。  
「それで残らず梅ぼうし」とは、身揚り分の借  
金を残らず埋めるに梅干をかけたのである。

うめもどき 控の柏、梅擬のうけ(聖  
徳太子)

「落葉紅梅擬とも書く、本邦山地に自生する  
落葉灌木で、高さ丈餘に達す、葉楕圓形にし  
て尖り細鋸歯を有す、花小にして帯白色であ  
る、果實は小球形の核果で赤色、稀に白色な  
のものもある。

\*うもれぎ 埋れ木の何時の盛りに  
何時の花、何時の時をか待つべき  
ぞ、最明寺殿 花咲く頃を埋れ木の

、みのなる果こそ口惜けれ十二段  
「埋木木幹が久しう土中に埋没して化石に變  
状したるもの。最明寺殿百人土師のこのあた  
りの文は、謡曲鉢の木を材料とし、十二段の  
この文は、平家物語巻四、源三位賴政のうら  
もれ木の花除くこともなかりし、みのなる  
果ぞあはれなりける」の歌句により、なほこの  
あたりの文は、謡曲鉢の木を材料とした。

\*うら くらが寝た懐へ盗人が這入  
つて 堀川波紋、うららが父いき世  
の時は博打好き(薩摩天皇) 心中が  
嬉しくてうらなだがこぼるゝと、  
泣いて見せければ(加増曾我) みづ  
子なうらゝが苦にして、其乳して  
育てたも五郎介殿を思ふゆる(大織  
冠)

「おのれ(己)が略されておれとなり、「お  
ら」うらと轉訛した語下俗人のつかふ自稱  
代名詞。

\*うらかく 矢の根碎けて裏かかす  
(文武五人男) 裏をかかすなやれ鐵を  
傾げよ(大原圓窓)

「裏鉄矢または刀槍などが突立つて裏まで貫  
き通る。

\*うらかた 御典薬占占かたよと、ひ  
そめく聲々々事ならず(蛭合歌)

「占方」占をする人、陰陽師。「占形」占に出  
た象。

\*うらがね 是且那樣、上物の裏金二  
千足戸棚にあらう(水朔日)

「裏金」雲獸の裏に打つてる鐵片。「裏金は尻  
金とも云うたので、伊達鑿五人男(寶永四年  
刊)二の巻に「かづらきといふ大雲獸しりか  
ねの厚さを二分三分と極め」と見えてゐる。

うらかべかやす ふと頼まれ奉りし  
さいては置かれず、裏壁かやして  
跡をつめんと思ひ(用明天皇)

「裏壁返」かやすはかへすの訛。裏壁を塗  
つてあつて、その裏の方を塗り返すをいふ。  
以て始末をする意に職人にふさはしい言葉  
を用ゐたのである。

裏菊の裾に薩(薩摩歌)

仙臺城主、松平陸奥守  
吉村の羅羅印

裏釘かやす 我が秘  
術を働かば返討ちに討つ  
ことあらん、最期に我を  
恨むなよ、やあ間緩い間緩い裏釘  
かやすな、さあ来い(國性齋)

「かやす」往かへす(返)の訛。裏まで貫き出  
入れるを云ふ。

裏差の筭 床の硯引寄せ、三行牛に  
さらさらさつて去狀、裏さしの筭  
暇の印と巻込んで(會稽山)

刀の裏に差す金屬製の筭。昔は筭のみを刀裏  
に差しもした。裏に筭を差すに小刀を差しもし、  
其小刀を裏差といへどそれは別。

うらしまのみ 下に置かすの可飲  
や、浦島飲ばあける事法度にして  
の潮干飲(加増曾我)

「浦島飲」浦島太郎の玉手箱はあけてはならぬ  
といふ事から、酒盃を玉手箱に擬してあけて  
はならぬの洒落である。

\*うらしら ちよつと祝ひましょ、う  
ら白ゆづり葉天麩

「裏白」齒染のことで、葉の裏白いから云ふ。  
和漢三才圖會に「面青背白、四時不枯、以飾

元且嘉祝之物」。  
\*うらちどふ 自らは源氏、御身様は平  
家、若し只今にも義朝のゆかりと  
ならば如何し給はんと、よそなが  
らこそうらちどひけれ鳥帽子折、そ  
の心根が聞きたいと、騒がぬ顔で  
裏問へば(卯月栞) 七左衛門殿は何  
方へ、定めて懸も寄りましょと、  
筒所の方からうら問ひましょ(安枝)

「裏問」心中を問ふ。先方の返辭によつてそ  
の心底を知らうとて尋ね問ふ。「うら」と  
は心をいふ、詩に「不離手裏」と見えてゐ  
る。「うらちどふ」うらなしなどいふ。「う  
ら」は即ち心臓である。

うらなし うらなしおつ取つて一ふ  
り振出す手の内に、握り  
治むる六十餘州(三國志)

「裏無」配草を編んで作り、裏  
のつかぬ一枚草履をいふ。九  
州では襪を編んで作れる草履  
をいふ。越前秀國傳物類稱  
呼、卷四器用の部に「江戶に  
ていふかはざうりを九州にて  
うらなしと云ふ」

うらはん 冥土の使繋ければ浮世の  
名残これまでと、梓の弓のうらは  
ずに鼓走してぞ失せにけり(卯月潤  
色)

「上善」末頭ともいひ、弓の上端の弦をかける  
所。

うらはん いや私印判持ちませ  
ぬ、そんなら父が裏判(と今色)

「裏判」裏印の裏に彫刻した印。昔は實印と、  
實印の次に位する裏判と云ふのがあつて、實



〔しなうら〕

印事印も印材の兩端に彫り、または別別の印材に彫つたのもあつた。

**うらやさん** 神子山伏にうらやさん(囃山遊) おのれが威勢を振はんと、うらやさんの道満までぐるになつて偽すわ(弘毅殿)

「占算」の義。書言字彙に、占算を「うらやさん」と訓じてある。算木を以て占ふ者。實字書。

**うらやす** よろづやすやす浦安が木のもとにて、正月三日の寅の一天誕生します(大經師) 忝くも正月元日寅の一天に、伊勢の國豊浦安が木のもとで安安と御誕生あれば(天鼓)

「浦安」四海波靜に安らげき義。日本國の美稱。神武紀に「伊弉諾尊自此國曰、日本者浦安國、細支千足國云云」この文は萬歲頃であつて、「浦安が木のもと」とある。木の本」は、「扶木の本」の義で日本のことであらう。淮南子、地形訓に「扶木在兩州、日之所出」とありて、註に「扶木、扶桑也」と見えてゐる。「豊浦安」の豐は、豐葦原などらふ豐と同じ語で嘆美の意を表はす。

**\*うらわ** 須磨の浦の松の行平立 歸り來ば(堀川波鼓)

「浦出入曲れる濱邊。「あら頼もしの御歌や云云」をも見よ。

**賣買高い** 賣買高い此の節二貫目近い二十兩(女腹切) 賣買高い世の中でも、金とたはげはけは澤山な(天網魚)

當時は正徳元年鑄造の悪貨な四貫字銀通用してゐる時代であるから(心中天網魚巻)に「今の治兵衛が四つ三貫貨の才壺打ちみしやうでも何處から出る」とあるは、なほ四貫字

銀の通用せるを示してゐる(金貨との兩替にも、物品の賣買にも、銀の利目が薄い爲に高額を要し、世智辛い世ならぬといふのである。

**うりやねが** 瓜實顔の旦那殿、東寺から出た人さうな(舟波興作)

瓜實顔とは瓜實のやうな形した顔で、美しい顔をいふ。枕草紙「うつくしき物の條に「瓜にかきたるこの顔」と見え、感にも「瓜實」(二九兩)などいふ。東寺は瓜の名物の地であれば(とうじ)を見よ。瓜實の條から、「東寺から出た人さうな」とつづけたのである。

**うりへぎ** そなたの身を賣らする程ならば、三百兩もしてやつて、うりへぎの百兩も手に持つたがよい(答燈籠)

先度の脇指三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下坂寸も焼も變らぬを八兩で買替へ、貳兩で銘を彫らせ、拵へ濟して大坂へ下し、その賣へぎの二十兩(女腹切)

「賣物賣買しての差引請け。原價を引去つての利得。

**\*うりようこ** 右龍虎・左龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の關や(天網魚)

「右龍虎・果林子作・國性爺合戦、九仙山の條に見え人物である。假作人物傳の「うりようこ」及び「龍吟流は珍しかず」を見よ。

**\*うるしこ** 塵紙屋めがうるしこし程な薄元手(天網魚)

「漆薄吉野紙をいふ、漆を通すに用ひる。うれたし 葎生ひて茂れる宿のうれたきに 假にも鬼のすだくなり(飛矢)

「うれいたし(葎甚の義、日本紀に「概哉」を訓んである。葎はしい。いやらしい。むづら生ひて茂れる云々)をも見よ。

**\*うろろ** あつといふより納戸に入り、うろろくして身にしみて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろろる涙(重井筒)

うろせうと途方に暮れてさまふ貌。「うろろる涙」とは、途方に暮れ涙の出で目のうるむこと。「おろおろ」をも見よ。

**\*うろくづ** 山野の鳥獸河海のうろくづまで(嵯峨天皇) 北の方を始めとし、うろくづ好みの若宮に(松風)

「鱗」魚類の稱。「うろくづ」は「うろくづ」(色海)の轉、魚は鱗に色色あればいふ。嵯峨注倭名類聚抄に「鱗。唐語云、鱗音隣、伊路久都、俗云伊呂古、今俗呼「字呂古者、轉訛也。

**\*うろこがた** 合せて三つの鱗形、北條五代の鎌倉や、時

の時たる時頼の(最明寺殿) 腰から下を吉岡の裾黒に鱗形、北條の御紋ぞや(五人兄弟)

「鱗形」北條氏の紋。

**うろこがたのこしがはり** 鱗形の腰替り白頭の振禿

二本松の城主とかや(薩摩歌)

「鱗形の腰替」奥州二本松の城主、丹羽五郎三郎尹重の漏風印。

**\*うろち** 轟く穢土は假の宿、有漏路無漏路の中休み(卯月調心) 心一つをいろく結ぶば有漏路(薩摩歌)

「有漏路」有漏は無漏に對する語で、漏は漏泄

の義、煩悩は過を漏泄すること願ひなければこれを有漏と云ふ。有漏路とは煩悩の垢に充ちてゐる生死の旅路と云ふことであつて、婆娑即ち娑世をいふ。

**\*うろん** からだば七十の半男、みすみすのうろん者、せががれが相手に存じもよらず(井筒) 證據なくてはうろんなり(國性爺)

「胡亂怪しく疑はしいこと。支那では「胡亂」をHindunと發音して用ひらる。「胡亂道」胡亂道など分けても用ひられてゐる。「亂」の客音「ロ」である。思ふに昔本邦人が廣東地方に渡船してゐた際佛へた語が廣まつたのであらう。正法眼藏(空華の巻)に、華時の前後を胡亂して有無の議論あるべからず、易外本節用集に「胡亂。また釋迦路の禰家龜鑑にも、「胡亂指注臂不外曲」と見え

**\*うる** 世の有爲無常の伯母として

も知つて居る(女腹切) 飛花落葉の風の前には有爲の轉變を悟り(兼好)

「有爲諸種の因縁和合して作爲される諸現象をいふ。法華玄鏡に「爲と有起作、故名有爲」。この世は總て因縁によつて假に成れるものなれば、何事も變化して常なきものであるによつて、有爲無常、有爲轉變、有爲生死有爲の境などいふ。

**うららう** 君にかゝつて一貫五百がうららうつんだこの菘藏、弓矢八幡身にくれる(菅庚申) 間遠くば遠目鏡、近くへ寄つて物言はいうのらうつめと、ざわめきて今やいやと松風や、裾に模様真葛原(兼好) 愛甲の三郎と、外郎つんでぞしなだれける(虎が磨)

「菘藏は過を漏泄すること願ひなければこれを有漏と云ふ。有漏路とは煩悩の垢に充ちてゐる生死の旅路と云ふことであつて、婆娑即ち娑世をいふ。

「胡亂怪しく疑はしいこと。支那では「胡亂」をHindunと發音して用ひらる。「胡亂道」胡亂道など分けても用ひられてゐる。「亂」の客音「ロ」である。思ふに昔本邦人が廣東地方に渡船してゐた際佛へた語が廣まつたのであらう。正法眼藏(空華の巻)に、華時の前後を胡亂して有無の議論あるべからず、易外本節用集に「胡亂。また釋迦路の禰家龜鑑にも、「胡亂指注臂不外曲」と見え

「有爲諸種の因縁和合して作爲される諸現象をいふ。法華玄鏡に「爲と有起作、故名有爲」。この世は總て因縁によつて假に成れるものなれば、何事も變化して常なきものであるによつて、有爲無常、有爲轉變、有爲生死有爲の境などいふ。

「菘藏は過を漏泄すること願ひなければこれを有漏と云ふ。有漏路とは煩悩の垢に充ちてゐる生死の旅路と云ふことであつて、婆娑即ち娑世をいふ。

「胡亂怪しく疑はしいこと。支那では「胡亂」をHindunと發音して用ひらる。「胡亂道」胡亂道など分けても用ひられてゐる。「亂」の客音「ロ」である。思ふに昔本邦人が廣東地方に渡船してゐた際佛へた語が廣まつたのであらう。正法眼藏(空華の巻)に、華時の前後を胡亂して有無の議論あるべからず、易外本節用集に「胡亂。また釋迦路の禰家龜鑑にも、「胡亂指注臂不外曲」と見え

「有爲諸種の因縁和合して作爲される諸現象をいふ。法華玄鏡に「爲と有起作、故名有爲」。この世は總て因縁によつて假に成れるものなれば、何事も變化して常なきものであるによつて、有爲無常、有爲轉變、有爲生死有爲の境などいふ。

「菘藏は過を漏泄すること願ひなければこれを有漏と云ふ。有漏路とは煩悩の垢に充ちてゐる生死の旅路と云ふことであつて、婆娑即ち娑世をいふ。

「胡亂怪しく疑はしいこと。支那では「胡亂」をHindunと發音して用ひらる。「胡亂道」胡亂道など分けても用ひられてゐる。「亂」の客音「ロ」である。思ふに昔本邦人が廣東地方に渡船してゐた際佛へた語が廣まつたのであらう。正法眼藏(空華の巻)に、華時の前後を胡亂して有無の議論あるべからず、易外本節用集に「胡亂。また釋迦路の禰家龜鑑にも、「胡亂指注臂不外曲」と見え

「有爲諸種の因縁和合して作爲される諸現象をいふ。法華玄鏡に「爲と有起作、故名有爲」。この世は總て因縁によつて假に成れるものなれば、何事も變化して常なきものであるによつて、有爲無常、有爲轉變、有爲生死有爲の境などいふ。

小田原うゐらう大磯平家藤澤の

(丹波與作) 丹波元の順宗の朝禮部員外郎であつた陳延... 誦、元の滅んだので明に仕へるを潔しとせず...

平次、外郎つんで女に物いふやうな未熟な三郎と見透して、序云、うゐらう餅といふが... うんかく、帝を始め卿相雲客...

うんきりん 脈論。運氣論(冷泉節) 運氣論、漢方の醫書、三卷ありて、宋の胡敬... うんくわん 運關三百六十輪、天運...

うんげん 阿克將が扮装はうんげんの赤装束、國性爺後日 (櫻柳、櫻柳、赤地の錦に色色の絹絲を以て、...)

うんざい やあかましいうんざい めら(日本武尊) やあやかましい

うんざいども、音にも聞くらん(女護島)

「うんざい」(有財)に撥音「ん」の増加した語で、「うんま」(二たんだ)只「うんま」...

うんじやう 先年奥州國司の時、金山貢物の運上にて公家一番の金持(毘田川)...

うんする 今令名波道愚と申す雲水の身となり(薩摩歌) 「雲水」行く雲流れる水の如く所定めずきま...

うんすん 大悲の利剣を親に打つて、うんすんを二日飛びなれば(大織冠) ほんなん五郎、うんすん六郎(國性爺)...

だもので、長崎川これに做つて遊戯した。一種類の紋様十二枚あるものが四種あつて總計四十八枚ある。また七十五枚あつて。明和安永頃最も流行し、寛政三年これを玩ぶを嚴禁された。...

一内一枚は青と唱へ、唇一内一枚は青と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。此二枚は四枚の内一枚に御座候。四枚の内、青三と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。四枚の内、歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

四の四枚の内、青四と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。四枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

五の四枚の内、青五と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。五枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

六の四枚の内、青六と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。六枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

七の四枚の内、青七と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。七枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

八の四枚の内、青八と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。八枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

九の四枚の内、青九と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。九枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

十の四枚の内、青十と唱へ、青く彩色、歌五十に相成申候。十枚の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

十一の歌にて、青馬と唱へ、金泥等にて彩色、歌五十に相成申候。四の内、上上の札に一青き歌十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。一内一枚は赤と唱へ、赤く彩色、歌五十に相成申候。

うんたち 一えうてう

の札に御座候。一内一枚は十の馬と唱へ、一内一枚は馬と唱へ、歌五十に相成申候。一内一枚は馬と唱へ、歌五十に相成申候。一内一枚は馬と唱へ、歌五十に相成申候。

うんたち 生れば長崎國訛、こりやうん達まだ市五郎三藏の船は見えうん(博多)

\*うんつく 自身の押へ手ばかりの上戸なれば、本来無分別無常うんつくとも頼すべし(扇八景)

えい いえい 空に紫の雲氣たなびき、斗牛の間にえい いえい たり(扇山遊)

\*えいかん 山彦征伐の勅宣を願ひ

えい いえい 空に紫の雲氣たなびき、斗牛の間にえい いえい たり(扇山遊)

\*えいかん 山彦征伐の勅宣を願ひ

え

奉り候所に、懽感誠に淺からず(用明天皇) かれて寂闇に達せし府内親王が忠節(百合若) 直ちに懽感あるべしとて(露丸) 御退治の懽慮猶豫の山承り(用明天皇)

\*えいきよく 拙き藝の部曲を御遊覧の爲ぞとて(源義経)

えいじつ 随分弓矢の稽古精出し申さうぞ、永日永日と暇乞して歸りけり(分鑑) 盃ば永日永日、然らば春永末永月永日永、年の壽命も永々と(電女)

\*えいめい 小節を規る者は榮名をなすことば(三國志)

えいらくせん 永樂錢の駕籠印



えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうが 金剛山を要害として住吉天宮に打つて出で(女櫛) 備嚴しき其景色鳥も通はぬ要害なり(臥内八島)

えうたう 三十ばかりの亂れ髪、盛り過ぎたる天桃の、春を傷める姿にて(女護身)

えうてう 花の地肌筋の窈窕と、目元に位備はりて(持統天皇)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)

\*えうてう 寒竹のえうてうを梢の風(音添) (十二段)